

## キャリア教育における「キャリア発達」概念の臨床心理学的考察 ー教員養成系学部生の教職選択プロセスとアイデンティティ形成ー

宮野 素子\*

秋田大学教育文化学部

若年無業者および早期離職者の増加が我が国における緊急の課題となっている。現代社会の急激な変化は、若者の学校から社会へのスムーズな移行を困難にしている。「生きる力」の育成をその教育理念の中心にした学習指導要領に対応して、文部科学省はすべての学校段階においてキャリアおよび職業教育のシステムティックな実施の推進を決定した。

本稿では、高等教育機関におけるキャリアおよび職業教育におけるキャリア発達の問題を心理学的に論じる。3事例が紹介され、彼らのキャリア発達における職業選択にかかる意思決定のプロセスおよび積極的関与が検討される。

**キーワード：**キャリア教育、同一性発達論、生きる力

### はじめに

我が国のキャリア教育は、1989年3月に告示された学習指導要領の中で、自らの選択で主体的に「生きる力」の育成を目指すという指導観から、進路指導を生き方の指導と位置付ける理念が示されたことに始まる。1999年の文部科学省「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」において、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を、小学校段階から発達段階に応じて実施する必要」と強調 ([http:// www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuyo/chukyo4/houkoku/1288248.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuyo/chukyo4/houkoku/1288248.htm)) し、高等教育においては2000年の大学審議会答申においてキャリア教育の定義を行った。以降、高等教育におけるキャリア教育の政策的推進は加速し続けており、2008年には職業指導（キャリアガイダンス）を大学における教育活動に位置付けることを明確にしている。

現在、学校教育におけるキャリア教育は、個人のキャリア発達への支援を通して、主体的に社会と関

連を持ち、生涯にわたって続く自己実現のプロセスを歩む力の育成へ目標をシフトしている。

さて、高等教育は、そこで展開される内容によって程度の拘束が生じる専門性の特質から、高等教育の場に参入する時点で、すなわち高等学校修了もしくは同等の資格修了と参入の業境の時点で、若者はなにがしかの将来の職業に対する、さらに言えば未来の自己像の方向性をすでに与えられることになる。言い換えれば、大学の学部選択の段階で、ある程度の将来の方向性への主体的模索と決定が要求される。その中でも医学部と教育学部は、明確に専門性に彩られたカリキュラムの提供とそこへのコミットメントが要求されるのであるが、たとえ、入学時に十分なコミットメントが果たされていたとしても、入学後の大学生活の現実を通り抜ける中で、再度、選択の問い直しが行われ、あるいは、選択の方向づけの確認が行われてゆく。

筆者はかつて、教員養成系大学に所属する女子学生を対象に面接調査（宮野，1991，未公表）を実施した。教職選択の経緯や大学に入学し専門教育をうける中で、キャリアを通しての自己実現への意識がどのような経過をたどるかを明らかにした。本稿は、高等教育でのキャリア教育におけるキャリア選択の課題が個人のキャリア発達を中核として生涯発達に

2017年1月10日受理

\*Career Development and Identity in University of Teacher Education

\*Motoko MIYANO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

においてどのような意味をもつか、Erikson, E.H.の同一性（アイデンティティ）形成の視点から心理学的に論じてゆく。さらに、面接調査で得られた具体的な語りのデータを3例提示して、キャリア発達に大きく関わる心理的要因について検討してゆく。

## 1. キャリア発達と青年期の課題

青年期とは、「いままで役割実験から自由であったものが、彼の属する社会のある分野に、彼に適した場所を見出すために用意された時期」（Erikson, 1959/1973）である。すなわち、大人と子どもの境の身体と、大人と子どもの精神をもって発達過程におけるその時期を生き抜き、最終的に自らの手で境界に線引きを行う課題に取り組む時期である。未開社会にあっては、社会的装置として通過儀礼が機能しており、ある一定の年齢の訪れとともに、所属する社会の生産活動の主体となる大人としてのアイデンティティは自明のものとして保障される。そもそも青年期という概念、すなわち経済的にも精神的にも親の支援を必要とする子どもと考えられる一方で、認知や思考の能力や運動機能においておおむね完成される大人であり、同時にそのどちらでもない青年期の概念は、近代社会の産物であり、青年期の人々に対して近代以降の社会は、学校教育を社会への移行装置として機能させてきた。我が国の『教育基本法』には、教育の目的を、この境界にある人々を高度化・複雑化する社会に適応し、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」としての国民の育成としている。

社会の形成者となることとは、すなわち社会の生産活動に何らかの形で寄与することに他ならず、『教育基本法』では教育の目標として「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」をあげている。個人にとって、所属する社会の生産活動に何らかの役割を担い責任を持って参加している、さらに社会の発展に寄与しているという自覚は、個人の自己価値観や自尊感情に大きく影響する。この意味で、職業選択の問題は青年期における重要な課題である。DSM診断が国際的に急速に活用され始めるDSM-Ⅲに続くDSM-Ⅲ-R（1987）では、幼年期・小児期・青年期の障害の一つに、同一性障害のカテゴリーが含まれており、評定項目の一つに職業選択の不確実さへの苦悩の有無をあげていた。その後のDSM-Ⅳ（1994）およびDSM-Ⅳ-TR

（2000）では、「臨床的関与の対象となることのある状態」として仕事への不満や職業選択に関する曖昧さといった「職業上の問題」が含まれていた。一定の職業を選択し、その中に自己を投入する行為は、社会的な生き物である人間が要求され、同時に各個人が自らを定義することである。職業は、「私はどのようなものであるか」というアイデンティティを外に向かって指し示し、自らを社会に定位させる中核といっても過言ではない。近年の若年無業者や早期離職者の増加は、社会資源の損失として重大であろう。

学校教育において進路指導は長く個々の青年の特性を把握して、その特性に合致した職業についての情報を提供するマッチング理論と呼ばれるアプローチが主流であった。現在も心理臨床の場でクライアントのパーソナリティ理解を目的に使用されることの多いKochのバウム・テストは、もともと職業指導における適性検査として開発された（1957/2010）。

菊池（2012）は、学校教育におけるこの「school to workという課題」に対して、「職業指導から進路指導・キャリアガイダンスへ、職業相談から心理相談へ、そしてキャリア教育へと、school to workの支援をめぐるアプローチは変わってきた」と述べる。そしてその変化を「vocationからcareerへ、vocational choiceからvocational development, career developmentへ」とし、さらに、キャリア発達とはどのようなものかを次のように述べている。

キャリア発達とは、過去・現在・未来の時間軸の中で社会との相互関係を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく力の形成である。社会認識と自己認識の結合としての自己理解と自己統制、つまり社会の中で自分をとらえ、自分をコントロールし、方向づけていくことは、生涯にわたって続くプロセスである。働くこと（役割を果たすこと）の中で自分を生かし、それを通して社会の一員として主体的に生きていく力は、ある年齢に達したからと言って自然に身につくものではなく、様々な経験を通して育成される。（菊池, 2012）

すなわち、生き方そのものとしてのキャリアであり、学校教育におけるキャリア教育とは、マッチング理論に基づいた職業役割の選択から、職業という一面にとどまることなく、全人的な人生上の役割への主体的な関与も含んだ自己実現、生き方そのもの

の支援へとシフトしているのである。

## 2. キャリア発達とエリクソンの漸成説と同一性（アイデンティティ）

現代の学校教育において指導の根幹をなす理念であり、キャリア教育の基盤をなしている生き方の指導は、個人が自己の個性を理解し、社会の中で何らかの役割を果たし生産活動に寄与すると同時に、役割課題の遂行を通して自己理解を深め、新たな課題発見と課題解決の模索を開始するという、生涯発達の理念に基づいている。この生涯発達論こそ、個人の精神的成熟における社会とのかかわりの重要性に注目したErikson, E.H.の漸成説と同一性（アイデンティティ）の考え方が大きくかかわっている。同一性への注目は、彼自身の出自とその後の人生に強く影響を受けているのであるが、Eriksonの彼を取り巻く社会との関係性の中で自らを同定してゆく試行錯誤は、現代の学校教育の理念の根幹をなす生きる力の獲得の過程にも重なっている。以下、鑑（1990）の記述をもとにその過程をたどってゆく。

Erikson, E.H.は、1902年にドイツのフランクフルトで生まれた。母親はユダヤ系デンマーク人であることがわかっているが、父親についての情報は一切不明であるという。出自の不確かさは、すでに自分はどこの誰であるかという、根源的な問いをもってこの世に生まれた彼の人生を方向付けているように思われる。母親はやがてハイデルベルグ近郊の町で小児科を開業する男性と再婚し、エリクソンは養子として迎えられた。芸術的才能に恵まれたエリクソンは、絵画学校に入学したのち画家としてのキャリアを歩み始める。しかし10年が過ぎ、芸術家としての十分な才能に対する不信心から、彼は絵画の道を自ら閉ざしてしまう。社会における自分の場所を失ってしまったのである。定位させる場所を失うことは、同時に未来への展望を失うことである。混乱状態の彼に救いの手を差し伸べたのが、後に精神分析家として青年期心理学の大家となる友人のBlos, P.であった。Eriksonは、Blosの勧めによって、ウィーンにあるFreud, S.の娘Annaの児童を対象とした精神分析治療を行うオフィスで絵の教師として働き始めることとなる。ほどなくFreud, A.によって本格的な精神分析の訓練を受けはじめたEriksonは、みるみる才能を開花させたが、第2次世界大戦の開始とともにユダヤ人迫害を避けてアメリカに移

住し、東海岸のボストンから西海岸はサンフランシスコへ、再び東部へと仕事の間を移しながら、彼自身の心理学の体系を構築していった。すなわち、Erikson自身、人生の開始から生涯を通して「自分とは何か」を問い続け、とりわけ社会との関係における自己の存在証明を追い求めてきた人物といえよう。

Eriksonは、Freud, SやFreud, A.の精神分析論に基盤を置きながらも、個人の人生を8つの段階に分け、個人は彼／彼女の所属する社会からそれぞれの段階に応じた課題が与えられ、その課題解決を図ることが求められているとした。心理社会的発達論と称されるこれらの課題解決のプロセスは、一過的なものではなく、生涯を通して内的な一貫性と同時に社会との関係性を段階的に発展させてゆくと考えた。すなわち、「成長する者はすべて予定表を持っていて、すべての部分が一つの“機能的な統一”を形作る発生過程の中で、この予定表から各部分が発生し、その各部分は、それぞれの成長が特に優位となる“時期”を経過する。健康なパーソナリティの各項目は、他のすべての項目と体系的に関連し合っていて、各項目はすべて各々の項目固有の系列の中にある固有の発達に規定されている。そして各項目は、その項目固有の決定的危機的な時が、正常な発達の中で到来する以前に何らかの形で存在している（Erikson, 1959/1973）」。

## 3. キャリア発達における教職選択と大学

大人時代への参入は、その属する社会集団に役割を担ったものとして、社会的生産過程に参加し、自らを発展的に寄与する価値の意識と責任の自覚を持った存在になることを指す。青年期の人々にとって、“大学生活”という時間と空間は、一種の“境界”として機能する。大人でもなく子どもでもない時間と空間が社会装置として保障され、機能するのである。社会的に保護されたこの猶予期間に、彼らは自分の興味関心を自身の能力や欲求に集中させる。親からの影響から離れ、主体的にそれまでの価値観の問い直しと試行錯誤を通して再構成を行っている。大学進学者は高校終了時点である程度、彼らが傾倒・関与するであろう将来の職業に向けての選択を行うことになるのだが、大学で行われる高等専門教育での経験を通して、あらためて自己の選択に対する問い直しが行われる。



教職は、特に小学校教員の場合、大学・学部選択と直結する。すなわち文学部や経済学部、理学部などと異なり、「教育学部」や「教育大学」というようにそこで展開されるカリキュラムが明確に示された教育機関で、相当の拘束力をもった専門教育を受けることになる。その中で自己の有用性や適応感は絶えず問われることになるろうし、最終的に何らかの自己決定を要求されている。

さて、2016年5月に文部科学省・厚生労働省は、3月に大学を卒業した者の就職の状況を報告している。就職率は全体で97.8%と1997年以来最高となり、女子の就職率は98.0%、4年連続で男子を抜いている。高学歴化、出生率の低下、平均寿命の長期化によって、育児終了後の長期化傾向、電気製品や加工食品の普及、進歩によって、家事労働は劇的に軽減されており、伝統的家族規範の弛緩なども影響して、女性の職業へのかかわりは多様化している。男性の単線型キャリアに対して、いったんキャリアを育児などで中断することで生じるM字型の就労パターンや、再び製造部門やサービス産業のパートタイムとして復帰する複線型キャリア（今田，1989）も女性のキャリア形態として根強いが、教育水準の上昇によって、生涯にわたって専門的職業の中で自己実現を図りたいという女性の欲求も高まっている。若林ら（1990）の論文では、すでに米国女性の50%が大学院修了を最終学歴と希望する調査結果が報告されている。

教職は、女性の専門的職業・キャリアとして、長い歴史を持っている。幼年期・児童期の教育が、たとえそれが社会的に要請される性役割によって伸長されたものであったとしても、女性としての特質すなわち、他者への興味関心の高さ、共感性の高さ、細やかさなどを発揮することができることや、労働条件において男女差が少ないことなどがあげられる。2016年にクラレがランドセルを購入した家庭にアンケートを行った結果によると、新しく小学校に入学する女児のなりたい職業は、1位ケーキ・パン屋、2位芸能人・モデル、3位花屋に続き、4位に教員があげられている（2016, [www.oricon.co.jp](http://www.oricon.co.jp)）。第一生命保険が未就学児および小学生を対象に行った調査でも、女児に関してはなりたい職業の2位に保育園・幼稚園の先生、5位に学校の先生があがっている（2016, [www.mainichi.jp/articles/20160108](http://www.mainichi.jp/articles/20160108)）。

筆者はかつて、教員養成系大学に所属する学生に対して教職選択のプロセスについて、インタビュー調査を行った。データが得られたのはかなり以前ではあるが、教職を選択した女子大学生が、どのような経緯で専門教育に入ったのか、専門教育の中でキャリアへの意識をどのように変化させてきたのか、実際の面接での語りを提示し、生涯発達としてのキャリア発達の視点から検討を行うことは意義があると思われる。

#### 4. キャリア発達の事例とその検討—教職選択をめぐる面接調査の語りをもとに

筆者はかつて、教員養成系大学に所属する学生に対して教職選択までのプロセスについて、インタビュー調査を行った（宮野，1991，未公表）。調査は1991年5月に教員養成系大学4年生の女子24名に対して、60分から90分の個別の半構造化面接によって行われた。質問項目は、Marcia（1966）、無藤（1979）、岡本（1986）を参考に、学部選択の経緯、入学直後、大学生活について、教育実習についてなど、個人の進路選択の岐路となるだろうライフ・イベントと自分史におけるそれらの出来事への自己投入、選択の問い直しと主体的模索および積極的関与（コミットメント）の有無と程度を中心とした。面接内容は協力者の同意を得たうえで録音された。

調査協力者のうち、調査段階で教職を希望すると答えた者は13名（54.2%）、企業への就職に進路変更した者は5名（20.8%）、未定と答えた者は5名（20.8%）、大学院への進学を希望する者は1名（4.2%）であった。実施からかなりの時間が経過してはいるが、最終的な教職選択までのいくつかの人生における局面における問い直しと主体的な模索について、実際の語りのデータを生涯発達としてのキャリア発達の視点から改めて検討することは、意義があると思われる。インタビュー・データの中から、選択の問い直しから主体的模索を経て教職への積極的関与が行われた事例1例、問い直しと主体的模索を経て最終的に進路を変更することに積極的関与した事例1例、および主体的な進路選択の模索をすることなく入学後に目的を失ったまま積極的関与出来ない事例を1例の計3例をそれぞれ代表的なプロセスとして紹介し、キャリア発達のプロセスを心理学的視点から検討する。

# ① A子さん（選択の問い直しと積極的模索を経て教職キャリアへの主体的関与に到達した事例）

小学校低学年のころに亡くなった祖父が教師だった。法事などで祖父の友人が集まると、「おじいちゃんのような良い先生になるんだよ」と頭をコンと押さえて言われたものだった。小学校4年生の時、「一生懸命で、怒って、悲しくて、涙がぼろっと出る」ような新任の女性教師に出会った。自分もなりたと思った。敷かれたレールの上を走る気がした。父親は教師ではなく、どちらかといえば教師一直線の自分を心配してくれ、折に触れて独り言のように職業の情報をくれた。

中学校では自分が通っていた学校が統合され大規模校となり、目立つ存在だったためかじめの標的にされた。教師はもちろん親にも言わなかった。つらかったが一日でも学校を休めば永久に登校できなくなると思っていた。やがていじめの事実が学校に知れることとなり、いじめの標的も移動していった。そんな中で無力な教師を見て、教師になるのがいやになった。

高校に入ったら別の進路を考えた。しかし目標とする分野の進学は苦手とする教科が克服できず、結局、女性で手に職がつき国立大学で採用率も高いというところで選択した。

入学してすぐ、ここは教師になるしかない大学だと思った。反面、教師しか見えない大学だと思った。他の感性と交わって教師になりたいと思うのと、染まりきって教師になるのでは違う。ここは危険だと思った。自分からアルバイトなどで他所の社会を見てゆこうと思った。実習で出会った先輩教師の中には、こんな人と同じ仲間になりたくないと感じる人もいた。自分の子どもを始終見ながら育てたい気持ちもあるので、いっそ腰掛で給料の良い企業に就職しようかと悩んだ。最終的に「思い切り働くのは一緒だし、自分のような変わり種が教師の中にいてもいいのでは」と思い5月ごろに結論を出した。

今はとにかくやってみようという気持ち。母親とは価値観がほぼ同じで、父親は少し古いと思うが、揺らぎのない芯が通った人だ。車を買う買わないでもめたときに、夜中の3時まで自分の言い分を聞いてくれた。考えると今は自分も父親寄りになっていると思う。正しいことを言っていると思う時は認めるし、その時にカッカしていてもあと

で必ず「分かった」というようにしている。これまでの自分を振り返り、一番変化したと思うことは、人や物事を受け入れられるようになったこと。「昔は嫌いもなかったけれど、好きも無かった」。

検討：

伝統的に女性の職業として教職は有利と考えられてきた。また小川ら（1980）の調査では、親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響について、教師、医師、看護師といった専門性の高い職業での継承性の高さを報告している。筆者の調査では8名（33.3%）が親または側が教師であった。それ以上にA子さんにとって重要であると思われたのは、両親からのしっかりした愛情に支えられた基本的信頼感である。自家用車の購入をめぐる父親ともめたときに、電話で夜中の3時まで言い分を聞いてくれたというエピソードや、職業選択に関する無視することも押し付けることもなくという態度は、彼女の主体性を担保し、自尊感情を高め、自己選択に対する確信を育んだと思われる。基本的信頼感の構築は、イジメの標的となる人生の危機にあって、彼女に世界を敵に回すことなく同時に自己への信頼を失うことをさせなかった。彼女は所属するクラブ活動でイジメの被害者となったのだが、イジメの相手が再び接近した時に同級生と共に戦ったという。「イジメられるままだとイジメられるのだと思った。叫ぶなり一発でも反撃しないと止まないと考えた」と、Aさんは語った。この体験は、その後の人生において積極的態度や自信につながることになるだろう。

教職選択も、きっかけは情緒の色彩を帯びた同一視であった。前述の小学生女子がなりた職業の調査において、教師の上位にランクされたパン屋や花屋などは、やはり女性の多い職場であるし、生活に密着した環境で接触する機会も他の職種に比べて多いことは想像に難くない。すなわち職業モデル以上に母親とは異なる身近な女性モデルとしての意味合いが強い。思春期に差し掛かろうとする少女が「涙をぼろっと流す」若い女性教師を女性としての同一性の対象とすることは自然であろうし、母親と異なる女性性の取入れの対象として機能したとも考えられよう。しかしながら彼女は、すべてを無批判に受け入れるだけでなく、適度な距離を取りながら、自分の選択の検証を続けていったように見える。

Marcia（1988）は、幼児期の共生－分離－個体

化と、青年期後期における主体的模索－積極的関与－アイデンティティ達成のシーケンスの間にあって、心理的時間的に介在するのがその家族との関係であると述べている。幼児が養育者と程よい距離を取りながら世界を探索していったように、青年は外的・内的家族から離れた探索の中で、A子が見事に「変わり種」と表現したのだが、世界に唯一無比の存在としての自己を定位させるのである。「昔は好きも無かったけれど、嫌いもなかった」段階から、自己の価値基準に責任を持ち、その基準に照合しながら判断し自己決定する能力が達成されている。

荒れた中学校で無力な教師の姿を目の当たりにし、専門教育に対する批判や、先輩教師の現実の姿に落胆し、職業－家庭という伝統的女性役割をめぐる葛藤を予期する問い直しと模索を続けながら、最終的に「とにかくやってみる」結論を出し、その決定に積極的に関与しキャリア形成のプロセスへと自己を投入しているように思われる。

父親寄りになっているという言葉は、社会に自己を定位させる際に参照基準となる一つの男性性モデルとしての父親像が機能していると思われる。調査では、他の例でも、母－娘密着と対照的に父親とは普段は距離を感じつつも、就職や進学などの場面では父親の意見を仰ぐ例が多かった。

## ② B子さん（職業選択の問い直しとキャリアへの積極的模索を経て進路変更した事例）

小学校に入学してすぐに書いた「私の夢」は、〇〇幼稚園の橙組の先生になることだった。大学入学まで教師という職業しか見ていなかった。第1希望であった他大学にも合格したが、教職に就くのであればという高校の教師の勧めや、国立大学なので親孝行かと思い入学した。思い切り泣いた。自分は教師になるべくレールを敷かれているのだなと思ったし、周囲もそう期待しているようであった。

しかし入学直後から、自分のやりたかったことが果たしてこのようなことであったのかという疑問がどんどん湧き出した。3年次の教育実習の頃まで悩み続けた。大学生活の最初の1年間はどん底だった。転学も考えたが、親にどういわれるだろうかと考えてみたり、辞めてどうするかを決定を自分で出すことができないまま諦めた。これではいけないと思い、サークルに入って人間関係を

作ってゆくうちに学生生活が楽しくなった。

講義内容は疑問の連続であったし、大学キャンパスの雰囲気には何かが欠けているように感じていた。実習先で同じ実習生の態度にも疑問を持ち、教職に進むことをやめるという結論を出した。思い切るまでとても苦痛だった。

中学時代の自分はすごく荒れていた。小さいことでもことごとく反抗した。行ける公立高校ならどこでもよいと思って受験した学校に合格した時、母親が「本当に良かったねえ」と言ってくれた。心から頑張ろうと思った。入学式で校歌を思いきり大きな声で歌ったのを覚えている。成績も常にトップクラスになり、自分が一生懸命やれば満足感が得られるのだと分かった。

あれほど反抗した母親と今は一番仲が良い。何かを始めようとするとき、親のことを考えないですることはない。中学時代の自分は反抗するのでも中途半端だったと思う。あの頃は自分を見失っていた。今は自分を大切にするようになった。父親とは思春期の頃は話も出来なかった。今もかしこまってしまうが、「一番尊敬する人です。」

目下のところ就職活動で忙しくしている。大学には情報が少なく自分で探しかない。急げ急げ、頑張れがんばれの毎日だ。これからどうなってゆくのか自信はまだないが…。

検討：

この事例はいったん職業選択に積極的に関与して専門教育に入ったのではあるが、入学直後から模索が始まっている。

筆者は、インタビュー協力者全員に対して入学以前の学校体験の中で「教師」にどの程度積極的で好意的な印象を持ちえたか、ポジティブな関係を持っていたかを尋ねている。11名（45.8%）が幼稚園から高校までで出会った教師の名前をあげ、「ああいう先生になりたかった」と答えている。子どもにとって唯一開かれた社会である学校の中で、担任教師やクラブ顧問は職業人として最も身近なモデルとなるだろう。教師と情緒的な人間関係を結びながら、「仕事をしている大人」として同一性の参照とすることは自然であろう。10数年間の学校生活の中で多様な教師像に接することで、ポジティブなイメージが損なわれることも当然あるだろう。前述のA子さんだけでなく、「高校時代に教師の汚い面を見て嫌だ



なと思った」と答えた協力者もあった。しかしながら構築された教師への信頼感がネガティブな体験を上回るときに、教職選択への主体的で積極的な関与が実現する。対象関係論的に述べるなら、“良い部分対象”としての教師イメージから、ポジティブな側面もネガティブな側面も併せ持つ“両価の全体対象”へと関係性をもつ自我の成熟が果たされたということであろう。自我の成熟にとって教師と子どもとの関係を、Jacobsonは対象関係論の立場から次のように述べている。「潜伏期児童の超自我と自我は限られた自立性しかもたないがゆえに、集団規範との関係と同一化を親から部分的にその他の権威者へと移行させてゆく。そして超自我と自我の目的を支配的影響力を持つ外界の人物に再投影したり、再寄与することで、子どもは内的現実を検討したり、現在の自己とその立場の限界を定めたりできるようになる (Jacobson, 1964)。」Eriksonは同一性の始まりについて、「身体的制御とその文化的意味、そして機能的快感と社会的信望を同時に経験することを通して、各段階でより現実的な自尊心の獲得に寄与するのである。この自尊心は、自分が確実な未来に向かって有効な手段を学びつつあり、社会的現実の中で明確に定義された事故に発達しつつあるという一つの確信となる。Erikson (1950) は、発達期にある子どもは、その一歩ごとに経験を支配する彼独自の方法（彼の自我の統合）が集団同一性の成功した変形の一つであり、その空間と時間および人生設計に合致するものであることを自覚し、その自覚から活力を生み出す現実感を得なければならないと述べている。

B子さんは人生の早期で教職選択の望みを持った。「幼稚園の子どもにとって神様」だった教師像は、高校生になって「親しくなるとやっぱり人間」であったとしても、取りあえず一直線に進んできた。不本意入学の危機を経て、彼女はもう一度自分の選択を問い直すことになる。「子どもは大好き」であるが、高校時代に自分が見つけた価値観や理想とした生き方は、彼女にとって教職を選択し教師キャリアとともに実現するものではないという主体的な選択と結論への積極的関与に至っている。

母親との関係を語るとき、全力で反抗した自分の姿と全力でそれを受け止めて行った母親の姿が生きて伝えられた。親の価値観に対抗しながら、見捨てられることがないという感覚を育てた彼女は、

世界に対して前向きで積極的な関与を始めて行ったように思われた。進路変更という課題は、B子さんに自己を問い直し、その後の人生において社会にどのような自己を定位させるかを問い直す作業を課すことになったのであるが、彼女が出した結論を全面的に支持してくれた親に対して、「何をするにも親のことを考えずにいられない」という言葉が示すようにいくばくかの罪悪感を持ちつつ、分離個体化のプロセスを着実に歩んでいると思われる。

### ③ C子さん（積極的に主体的なキャリアへの模索をすることなく専門教育に入り、関与の対象を見出せない事例）

取り立てて希望するところがなかったので偏差値で大学を決めた。他の大学にも合格していたが、高校や中学校の先生に相談するうち「ここでもいいか、先生でもいいかという気持ち」で入学した。絶対に教職をと思っていたわけではないので、大学生活の中でことあるごとに、教師になる人間はこうあるべきというようなことを言われて辛かった。人前でうまく話も出来ないの、子どもとうまく対応できず自信もなくなった。自分の描いた先生像をうまくやろうとウジウジ考えているうちに実習が終わった。この先どうしてよいか分からない。すべきことはいっぱいあると思うが、何をするわけでもなく一日が過ぎてゆき、気持ちばかりが焦る。

母親は難しい話をするとすぐに冗談にになってしまう。父親は自分以上に世間体を気にしてそういう側面からしか物事を考えないので、進路の話はしないようにしている。小学校中学校はお山の大将で来たのに、高校に入ると皆が偉いので、自分なんか前に出なくていい、言われたらついてゆくというふうになった。昔はもう少し自信があったのになあ。自分の性格がいつの間に消極的になったのだろう。いろいろと考えなくてもいいようなことを考えて、どんどん自己卑下してしまう。大学まで出たのにフリーターはいやだ。

検討：

C子さんは、自分の進路を自分で選び取ったという確かな感覚を持たないまま、専門教育の中で違和感を持ちながら、最終的な進路決定はおろか主体的な模索の過程にも踏み込めていないように見受けられた。Blusteinら (1990) は、アイデンティティ形

成の過程を自律的にうまく切り抜けた人は、計画的で自己内省的な意思決定のストラテジーを用いていると述べる。幼児期の自己万能感を放棄し、基本的信頼感に支持されながら正確な現実吟味に向かうことができるのである。C子さんは、教育実習で自分の描いた理想的な教師像を演じようと努力したのだが、それは多分に自己愛的な万能感の産物であろう。

面接調査全体を通して、入学の動機の曖昧さや、大学入学後のネガティブな印象は、その後の専門教育を有意義に位置づけない。苦痛な感情が4年間彼らを支配し、教職へのアプローチはもちろんのこと、別の進路への方向付けすら阻む印象が当時の筆者にはあった。自律的選択とは最終的には選択を行った主体に帰するものであっても、そのプロセスにおける主体的模索において個人を取り巻く対象関係の中から形作られてゆくものであろう。A子さんやB子さんのように、子どもは対象からの取入れや同一化を通して、個性を伸長し社会における独自の持ち場を定めてゆくのである。その意味で、最も重要な対象となるC子さんの父親・母親像は曖昧である。

職業選択に代表される“選択”のプロセスは、その選択されたものの主体への統合によって「自分は自分である」というアイデンティティの感覚を獲得することができる。C子さんのケースでは、進路選択はいわばマッチングの法則が優勢であり、主体的な模索や試行錯誤の体験の機会を失ったまま面接時点まで来たように思われた。その結果、かくありたい「理想的自己」と現実の自己像との間に相当のかい離が生じており、そのギャップの中で身動きが取れないといった状況であった。すなわち、キャリア選択とは選択された結果が重要なのではなく、選択への主体的模索と自己への統合までのすべてのプロセスを含んでいる。文部科学省中教審答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』（2011）では、「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割の関係を見出してゆく連なりや積み重ね」が、キャリアの意味するところであると述べられている。自分の人生への関心と主体的な模索、さらに選択された事態への積極的な関与の能力が必要であり、そういった能力育成こそがキャリア教育の目的であろう。

## おわりに

筆者は調査の中で幾度となく、「女の子だから」

という言葉を協力者から聞いた。最近の女子大学生のなりたい職業の1位は保育士という結果（[www.womaninsight.jp/archives/161877](http://www.womaninsight.jp/archives/161877)）や、前述の第一生命保険の調査において男児のなりたい職業がサッカー選手（1位）、野球選手（2位）、警察官（3位）との比較においても、社会的に規定された性役割観の影響はいまだに強いように思われる。また、女子の進路選択においては、職業生活における自己実現が、その先の家庭を作ること、すなわち結婚、出産、育児のすべてをコミで立てられた人生設計の上に果たされるのだという価値観が、筆者の行った調査時期を相当に経た現在もまだ、生きているように感じられる。こういった価値観によって、人生の早期からある一定の制約を受けている可能性はないのだろうか。このことは、女性の生涯発達において職業選択を代表とする社会的役割の“選択”における葛藤がいったん折り合いをつけて解決されたとしても、その後、再び浮上する可能性も示唆している。その意味においても学校教育におけるキャリア教育には、性役割意識へのアプローチも必要に思われる。

## 文 献

- Blustein, D.L. & Phillips, S.D. (1990) Relation Between Ego Identity Statuses and Decision-Making Styles. *Journal of Counseling Psychology* Vol.37, No.2, p.160-168
- DIAGNOSTIC AND STATISTICAL MANUAL OF MENTAL DISORDERS Third Edition Redition (DSM-III-R) (1978) American Psychiatric Association DSM-IV (1994) American Psychiatric Association DSM-IV-TR (2000) American Psychiatric Association
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*, International University Press（小此木啓吾訳・編『エリクソン：自我同一性－アイデンティティとライフサイクル』、誠信書房、1973）
- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*, W.W. Norton & Company, New York（仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房、1977）
- Jacobson, E. (1964) *The Self and The Object World*, International Universities Press, N.Y.（伊藤洸訳『自己と対象世界』岩崎学術出版社 1981）
- 菊池武烈（2012）キャリア教育、日本労働研究雑誌 p.50-53



- Koch, K. (1957) Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel 3. Auflage, Verlag Hans Huber, Bern (岸本寛治・中島ナオミ・宮崎忠男訳『バウムテスト第3版 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房, 2010)
- Marcia, J. E. (1988) Common Process Underlying Ego Identity, Cognitive/Moral Development and Individuation, Lapsley, D.K. & ClarkPower, ed. *Self, Ego, and Identity; Integrative Approaches*, Springer-Verlag, New York Inc.
- Marcia, J. E. (1966) Development and Validation of Ego Identity Status, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.3, No.5 p.551-558
- 宮野素子 (1991) 女子大学生の自己同一性形成についての一研究, 兵庫教育大学大学院修士学位論文 (未公表)
- 無藤清子 (1979) 「同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, 教育心理学研究, vol.27, No.3, p.178-187
- 岡本祐子 (1986) 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析, 教育心理学研究, vol.34, p.352-358
- 小川一夫, 田中宏二 (1980) 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究, 教育心理学研究, vol.28, No.4, p.328-331
- 鑑 幹八郎 (1990) アイデンティティの心理学, 講談社現代新書

若林 満, 宗方比佐子 (1990) 女子大生の職業意識とライフスタイルに関する日米比較, 名古屋大学教育学部紀要, vol.37, p.107-127

### Summary

The increasing number of those leaving work at an early stage and unemployed school graduates becomes an urgent task to solve in Japan. Today's rapid social change has brought young people difficulties in making a smooth transition from school to becoming a member of society. In responding to the new Courses of Study which stress importance of fostering the "Zest for Life", Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology decided to promote systematic career education to each school stage.

This paper discusses issues of "career development" in the career and vocational education particularly in a university setting from the psychological standpoint. Three case materials are discussed following their decision making and commitment process in the course of career development.

**Key Words :** Career Education,  
Identity Development, Zest for Life

(Received January 10, 2017)